

## 流されて

昔の水害の話を聴いたり、水害に関する古い資料を読んでいると、人が屋根に乗って流されたのを見たとか、助けてくれという叫びを聞いたなどの証言に出会うことがあります。今回は、水害で流された話が残る徳島県阿南市と香川県三豊市の例をご紹介します。

### ■城山神社の絵馬 (徳島県阿南市上大野町)

慶応2年(1886)8月5日より大雨が続き、那賀川下流域では7日夜に大水となりました。阿南市上大野町の城山神社に掲げられた絵馬には、那賀川の水害で家が壊れ、上大野町の医師・岸玄碩先生の家族ら8人が天井板に乗って流された時の様子が描かれています。現在の持井橋付近にあった家が大水で壊れたため、8人は天井板に乗って、下大野まで那賀川に並行して漂流し、ガマン堰付近から岡川の流れに入り、立善寺あたりに到達したといわれます。一里(約4km)ほど流されましたが、全員助かりました。九死に一生を得た岸先生は、城山神社のご加護のおかげとして、自筆の漂流絵馬を奉納しました。いま城山神社に掲げられているのは原図を復元したものです。<参考資料：阿南市史編さん委員会編「阿南市史第2巻」1995年など>



城山神社の絵馬



### ■溺死三十三霊之塔 (香川県三豊市仁尾町)

明治32年(1899)8月28日の台風により、愛媛県の新居郡では国領川の堤防決壊などで大きな被害が出ました。数日後、流木などとともに33人の遺体が香川県の仁尾の浜に打ち上げられました。当時は通信や交通の不便から、引き取り手もなく、身元も十分に確認されないまま、遺体は南の墓地に埋葬されました。3回忌には高さ2.3mの供養塔「溺死三十三霊之塔」が建立されて、毎年供養が行われてきました。その後、仁尾町(現三豊市)からの連絡により新居浜郷土史談会がこの塔の存在を知り、史談会の調査により33人の故郷が新居浜であることが判明しました。風水害から85年目の昭和58年(1983)に、仁尾町長や新居浜市長などが参列して慰霊法要が行われました。<参考資料：仁尾町誌編さん委員会編「新修仁尾町誌」1984年及び新居浜史談会「郷土史談第99号」1983年>



溺死三十三霊之塔



(地理院地図に加筆)